

## 近づくろ考ええること

浪江町長 馬場 有

先日、「広野町から考える―避難先からの「幸せな帰町」に向けて―」という国際シンポジウムに参加しました。

広野町は「緊急時避難準備区域」の指定が解除されて3年近くたった現在でも、町に戻った町民は3割にとどまっています。「戻らない」という選択をした約半数の町民、中でも若い世代が「幸せな帰町」をするために何が必要か、などを考えるシンポジウムでした。

その中で印象に残ったのは、すでに帰町したシニア世代の女性の発言です。彼女は、避難先での生活について、支援サークルでパソコンを教わったり、孫の教育についてアドバイスをもらうなど、広野にいたときには学べなかったようなことを学ぶ機会があった、そこで得た経験を、これからの広野町での生活に生かしていきたい、と語っていました。

私は、このような考え方はとても大切だと思います。

私自身、避難生活は4年目に入りました。今の二本松のアパートに移ってからはもうすぐ丸3年になります。浪江では、一軒家に孫も含めて三世代6人の生活だったのが、ここでは91歳の母と妻の3人暮らし。朝起きてふと、ここは天井が低いなと感じたり、どうしても隣の生活音が気になったりと、前の環境とは異なります。浪江の新鮮な魚介類が恋しくなることもあります。もちろん、本当に元の生活に戻るのかはつきり分からないことが、いちばんつらいことです。

しかし、悪いことばかりではありません。先ほどの広野町の女性のように、私も、大震災後に様々な新しい出会いがあり

ました。日本全国の多種多様な団体・組織の方だけでなく、学者や研究者、外国のメディアなど、浪江にいた時にはまず知り合うこともなかったような人たちと知り合い、浪江に手を差し伸べていただき、やり取りをする中で学ぶことが、たくさんあります。

発想の転換といいますが、同じことを経験しても、つらい苦しいだけで終わってしまうのではなく、それも人生の勉強だと考えて、そこから何かを学び、ふるさとの再生につなげていく―それが「幸せな帰町」ということにつながると思います。そういう気持ちで私もがんばっています。

それから、町中に出ると、「がんばれ」とか「テレビ見たよ」と、いろいろな方があいさつ代わりに声をかけてくれるのは、本当に元気が出ます。また、全国のボランティア、NPOなど支援団体からお手紙をいただいたり、新天地で再出発した浪江町民のお店の評判を聞いたりするのも、大きな喜びです。

戻るつもりの人、戻りたいけれども戻れない人、町民の皆さんの選択は様々です。しかし私は、どんな人に対しても、行政として何ができるかを考え、やれることはすべてやっていくつもりです。

明けない夜はありません。今は、陽の光がやっと少しずつさしつづつある状況だと思います。まだ道は遠いですが、一緒にがんばりましょう。

もうしばらく梅雨が続きますが、皆さんどうぞ体調管理にご留意いただきますようご祈念申し上げます。